

令和4年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業  
分野別強化事業

マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と  
所蔵館ネットワークに関する調査研究  
実施報告書

国立大学法人 熊本大学

令和5年2月

## 目次

第1章 事業概要 .....	2
1.1 事業の目的（全体） .....	2
1.2 今年度事業の目的 .....	2
1.3 実施体制 .....	3
1.4 実施内容 各部会の概要 .....	3
1.5 実施スケジュール .....	3
1.6 会議スケジュール .....	4
第2章 成果・課題・評価 .....	6
2.1 成果 各事業の成果 .....	6
2.1.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究 .....	6
2.1.2 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備 .....	6
2.1.3 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験 .....	6
2.1.4 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての合同会議 .....	6
2.2 課題 各事業の課題 .....	7
2.3 評価 総括と展望 .....	8
第3章 実施内容 .....	10
3.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究 .....	10
3.2 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備 .....	12
3.3 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験 .....	16
3.4 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての合同会議 .....	23
3.5 実施会議内容 .....	24
付録 熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター開設記念シンポジウム 「マンガ刊本アーカイブのめざすもの」開催について .....	31

## 第1章 事業概要

### 1.1 事業の目的（全体）

本事業は、昨年度から継続する形で、文化庁「令和4年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の一環として実施し、マンガの「刊本」（＝単行本・雑誌）のアーカイブに関する拠点及びネットワークを構築するとともに、それぞれの活動を通じて得られた情報・知見・人材を共有・公開する機会を計画的に創出し、統合的かつ体系的な「マンガのアーカイブ」連携基盤整備の推進を目的とする。

マンガ分野では、「研究機関等におけるメディア芸術作品のアーカイブ化」を支援し、所蔵情報等の整備を推進するとともに、産・学・館（官）の連携・協力により、分野・領域を横断して課題解決に取り組む。具体的には、マンガの原画と刊本（雑誌・単行本）とに対象を大別し、前者に関しては、横手市増田まんが美術館を「マンガ原画アーカイブセンター」の担い手として実装しつつ、後者に関しては、熊本大学を「マンガ刊本アーカイブセンター」の将来的な担い手に想定し、統合的かつ体系的な「マンガのアーカイブ」の連携基盤整備を推進してきた。

これまでも、原画／刊本両事業は、“車の両輪”として協力しつつ作業を行ってきたが、今年度は、以下のような事業を推進するため、共通課題を抽出した共同会議を実施するなど、将来的な合流——「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設置を目指した具体的な事業を設定する。

①日本のポップカルチャーの象徴であり、メディア芸術の核となるマンガの資料群（原画、刊本）の保存に関して、標準的・体系的な方法の確立に向けた調査研究を行う。全国の所蔵館と情報共有できる体制を整えるために、原画保存に関する相談窓口等を設けるとともに、所蔵館連携ネットワークの構築と強化を進める。

②本事業は、将来的なメディア芸術の中核拠点形成に向けた構想の実現を視野に入れて、マンガに限らず、メディア芸術各分野の先行モデル・ケーススタディとなることを想定し、中期的に計画している。そのため、事業を通じて得られる課題の発見や解決のための情報・知見、そして人材については、広範に共有すべく、事業実施プロセス自体を可視化・アーカイブするための調査研究を始める。

③メディア芸術連携基盤等整備推進事業の趣旨を踏まえ、メディア芸術データベース（ベータ版）において許諾を得られた作品の情報や原画・刊本の存在の発信を通じ、広く国内外に向けて、マンガをはじめとするメディア芸術各分野の価値創造に関して問題提起するための調査研究を行う。これに際しては、作家本人やその関係者、出版社など、「産」との連携の在り方を丁寧に検討する。

### 1.2 今年度事業の目的

上記のような目的の下、令和4年度の目的を以下の4点と設定した。

- 1) マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究
- 2) 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備
- 3) 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験
- 4) 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催

### 1.3 実施体制

表 1-1 実施体制

コーディネーター	鈴木寛之	熊本大学大学院人文科学研究部（文学系）准教授
統括アドバイザー	吉村和真	京都精華大学専務理事／マンガ学部教授
統括アドバイザー支援	イトウユウ （伊藤遊）	京都精華大学マンガ学部特任准教授 国際マンガ研究センター
メンバー	橋本博	特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表／合志マンガミュージアム館長
	三崎絵美	明治大学 米沢嘉博記念図書館
	田中千尋	北九州市漫画ミュージアム図書担当
	渡邊朝子	京都国際マンガミュージアム学芸室司書
	日高利泰	熊本大学文学部准教授
	池川佳宏	日本マンガ学会理事／熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター特定事業研究員（令和4年10月～）

連携機関：北九州市漫画ミュージアム（以下「北九州 MM」）、京都国際マンガミュージアム（以下「京都 MM」）、高知まんが BASE、国立大学法人熊本大学、特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト（以下「クママン」）、合志マンガミュージアム（以下「合志 MM」）、明治大学 米沢嘉博記念図書館 [50 音順]

### 1.4 実施内容 各部会の概要

#### 1) マンガアーカイブ協議会（6回）

原画事業・刊本事業相互の情報共有及び意見交換を行う。

#### 2) マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会（5回）

将来設置が必要と考えられるマンガ刊本アーカイブセンターが行うべき事業内容の検討（刊本の収書方針と範囲の検討、機関連携による刊本保存・活用計画の立案）、複本利活用事業の在り方の検討などを行う。合わせて、刊本ネットワーク施設による情報共有及び意見交換、「刊本プール」の運用の仕方と今後の展望の検討、マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた刊本ネットワークの形成を目的として開催する。

### 1.5 実施スケジュール

## 第1章 事業概要

業務項目	実施期間（令和4年4月1日～令和5年2月28日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
刊本センターの実装化に向けた調査研究	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備				◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験				◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
原画／刊本事業の合同会議開催	◆		◆		◆		◆		◆		◆	

図 1-1 実施スケジュール

### 1.6 会議スケジュール

- ①第1回マンガアーカイブ協議会  
日時：令和4年4月15日（火） 16：30～18：30  
開催：オンライン会議（Zoomにて開催）
  
- ②第1回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会  
日時：令和4年6月3日（金） 16：00～17：30  
開催：オンライン会議（Zoomにて開催）
  
- ③第2回マンガアーカイブ協議会  
日時：令和4年6月20日（月） 10：00～12：00  
開催：横手市増田まんが美術館 ワークショップルーム  
又は、オンライン会議（Zoomにて開催）
  
- ④第2回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会  
日時：令和4年7月29日（金） 16：00～17：30  
開催：オンライン会議（Zoomにて開催）
  
- ⑤第3回マンガアーカイブ協議会  
日時：令和4年8月5日（金） 16：30～18：00  
開催：オンライン会議（Zoomにて開催）

⑥第3回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

日時：令和4年9月27日（金） 13：00～15：00

開催：オンライン会議（Zoomにて開催）

⑦第4回マンガアーカイブ協議会

日時：令和4年10月14日（金） 15：00～17：00

開催：オンライン会議（Zoomにて開催）

⑧第5回マンガアーカイブ協議会

日時：令和4年12月10日（土） 10：00～11：30

開催：熊本大学 文法学部棟2階 共用会議室

又は、オンライン会議（Zoomにて開催）

⑨第4回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

日時：令和4年12月11日（日） 10：00～11：30

開催：熊本大学 文法学部棟2階 共用会議室

又は、オンライン会議（Zoomにて開催）

⑩第5回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

日時：令和5年2月1日（水） 14：00～15：40

開催：オンライン会議（Zoom会議・第2回マンガ原画アーカイブセンター運営協議会との合同開催）

⑪第6回マンガアーカイブ協議会

日時：令和5年2月1日（水） 15：50～17：30

開催：オンライン会議（Zoomにて開催）

## 第2章 成果・課題・評価

### 2.1 成果 各事業の成果

#### 2.1.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

将来設置が必要と考えられるマンガ刊本アーカイブセンター（AC）が行うべき事業内容の検討（刊本の収書方針と範囲の検討、機関連携による刊本保存・活用計画の立案）及び、複本利活用事業の在り方を検討し、現段階で考えられる AC の機能をまとめた。

具体的には、事業計画とロードマップの策定に向けた基礎調査として、本事業における有識者検討委員のアドバイスを受けながら、以下のテーマの実施を検討した。

- ・刊本センターの業務範囲に関する検討。運営体制及びコスト・収入などに関する具体的なシミュレーション。
- ・刊本資料のアーカイブの仕方に関する施設間における差異について、より細かい調査を行う。京都市立国際マンガミュージアムや明治大学米沢嘉博記念図書館のような「永年型アーカイブ」施設と、市立図書館の開架図書のような「消耗型アーカイブ」施設の違いに留意し、各施設の資料保存形式に関する調査研究。
- ・刊本の利活用に関する有益な情報（図書館必携マンガリスト、郷土作家・作品リストなど）の収集・提供の仕組み作り、イベントによる収益事業化についての協議。

#### 2.1.2 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備

将来的に AC が担う主要な役割の一つである「刊本ネットワーク所蔵リスト」構築に向けての準備として、以下の事項を実施した。

- ・刊本ネットワークに参加する施設が、それぞれ刊本資料をどのように所蔵しているかを確認できる所蔵館リストの構築を目指した調査研究を実施する。
- ・マンガ原画のデータと連動できる機能も備えた所蔵館リストの構築・活用に向けて、メディア芸術データベースをはじめとして、複数ある既存のデータベースの調査を行う。

#### 2.1.3 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験

- ・マンガ本の「プール」機能の外部化を目指し、受入れ～整理～再寄贈という当初構想していた機能が正常に働いた場合のコスト計算のための作業実験を行う。
- ・現在の刊本プール（森野倉庫）整理作業の第一段階としてごく簡易な仕分を実施し、保管すべき資料を迅速に絞り込む。
- ・国内外への刊本資料の効果的な再配分（整理・発送）の仕方を検討する。

#### 2.1.4 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての合同会議

マンガ分野における原画事業と刊本事業の早期合流に向け、年 6 回の合同会議（研修含む）を開催したが、それぞれの会議において有意義な意見交換がなされた。特に 6 月に開催した第 2 回会議に

は、株式会社講談社・森田浩章専務取締役を迎え、産業界との連携という角度から両事業のアーカイブの方向性について貴重な意見をいただけた。また、第3回会議では、マンガ原面の寄贈や相続に関する税務研修を、第4回会議では、マンガ分野におけるデータベース構築に向けた勉強会を開催。それぞれ第一線で活躍されている専門家から貴重な意見を聴講できた。こうした取組において、合流に向けた機運や一体感の醸成が図られたことが最大の効果であったと言える。

### 2.2 課題 各事業の課題

#### 1) マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

今年度は、これまでの議論を踏まえ、「マンガ刊本アーカイブセンター」の目的・機能・組織を明確化し、原案を作成した。原則的には、アーカイブに関する「相談窓口」に徹し、実際のモノが（一時的に）収集されるスペース（「刊本プール」）の運営には直接関与しない形を目指す基本姿勢が確認されたが、それに代わるスペースの確保に関しては、現在各方面に協力の呼び掛けを検討中である。来年度の運営開始を目標に、センターの運営体制及びコスト・収入等に関する具体的なシミュレーションが喫緊の課題である。

#### 2) 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備

メディア芸術データベースとの連携を進めつつも、所蔵館ネットワーク構築のための一つの肝となる、それぞれのマンガ資料をどこが所蔵しているかが分かる効率的な蔵書データの整備・共有のためのツールなどを具体的にどのように確保していくかは、今後引き続き検討していくべき課題である。

実際の刊本収集スペースの確保のためにも、既にマンガを所蔵、あるいは今後所蔵したいと考えている施設や機関とのネットワーク構築が急務である。過年度に実施した公共図書館へのマンガアーカイブに関するアンケート結果や、今年度実施した少女まんが館へのヒアリング結果等を手掛かりに、そうした施設の開拓を進めるのが今後の課題である。

本事業では当初、そうした施設に、マンガ刊本アーカイブセンターと連携した「刊本プール」で準備したモノを用意するやり方も想定していたが、「公共図書館が所蔵すべきマンガ本リスト」や「その地域出身の作家リスト」「その地域が登場するマンガ作品リスト」といった情報のみの提供も視野に入れる方向性が確認されており、そのための情報収集の仕組み作りが引き続き課題である。

#### 3) 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験

「刊本プール」の事業内での位置付け、これまでの実績と課題について検討を行った。マンガ刊本アーカイブセンター・所蔵館ネットワーク事業全体における正本複本の判断基準は、様々な立場からの視点が必要であり、これからの要検討課題である。事業全体の「保管」「活用」の検討と同時に、現在の刊本プール（森野倉庫）における整理の第一段階としてごく簡易な仕分を実施し、保管すべき資料を迅速に絞り込む作業とその手法のマニュアル化は、今後のアーカイブやネットワーク参加館の参考になり、事業全体にとって有益だと考える。マニュアルの早急なとりまとめが必要である。

### 4) 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催

原画事業と刊本事業の早期合流を目指した取組の中で、有益な意見交換や意思確認などがなされたのは大きな成果ではあったが、両分野がそれぞれ抱えている課題を整理し、より具体的な合流のゴールラインを設定するには至らなかった。引き続き、刊本アーカイブセンターの早期設置を目指し、「マンガアーカイブ機構（仮称）」構築に向けた準備に当たりたい。

## 2.3 評価 総括と展望

本事業は今年度、マンガ刊本のアーカイブに関する拠点及びネットワーク形成のための5か年計画の3年目に当たる。5か年度計画における最終目標は、熊本大学を担い手とする「マンガ刊本アーカイブセンター」の実装化と運用開始であり、今年度は、この最終目標に向けて、同センターの目的・機能を議論しつつ、その体制整備が目的であった。

昨年度同様、これまでの事業でも協力関係にあった施設・機関から、「現場」に近いスタッフを事業メンバーに迎えた結果、より現実的で実践的な議論を深められた。こうした事業の進め方自体、令和2年度に先行して実装化された「マンガ原画アーカイブセンター」と、同センターを中心とするネットワークが構築されるまでのプロセスを参考にしている。

今年度の大きな成果の一つは、「マンガアーカイブ協議会」というテーブルを設定し、これまで理念として掲げていた、マンガ刊本アーカイブとマンガ原画アーカイブの両事業を“両輪”とするアーカイブ体制の構築を推進し、今後の連携の在り方についての協議を一層深化させたことだろう。今年度最後の協議会では、今後も両事業のメンバーが一堂に会し意見を交わせる会議体を増やしていくとの方針が共有された。

一方、事業と並行した熊本県内での取組において、令和3年度に刊本を産官学連携で保存・利活用する試みの一環として、熊本県に「マンガ県くまもと協議会」が組織され、また、令和4年10月には「熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター」が設立され、刊本アーカイブセンターを設置する体制作りが一層進展している。

こうした過程の中で、昨年度末に課題として挙げられた下記の点について、今年度は具体的に議論し、来年度以降の具体的な方針を抽出した。

---

### A) 「刊本プール」の位置付けの再考

もともと「刊本プール」は、国内外におけるマンガ本の再配分のハブ（寄贈を受け入れ、別の施設に再寄贈するための一時置場）として構想された。しかし、実際に受け入れを始めると、圧倒的な物量の資料が寄贈され、整理・再寄贈の作業が追い付かない事実が判明した。そのため、来るべきマンガ刊本アーカイブセンターが、刊本の再配分の調整を目的の一つにするとして、実際のモノも管理していけるのか再考が必要、との結論に至った。現在は、モノとしてのマンガ本の「プール」機能の外部化を目指し、そのために、昨年度から続いて、受入れ～整理～再寄贈という当初構想していた機能

が正常に働いた場合のコスト計算を行うための作業実験を行っており、この結果を来年度以降、刊本利活用マニュアルとしてまとめる計画である。また、事業終了後の森野倉庫の位置付けについても検討していく必要がある。

### B) ネットワーク間データベース／所蔵館リストの構築について

ネットワークに参加する施設が、それぞれどのような資料を所蔵しているかを確認できる所蔵管理リストの必要性が確認された。また、データベースに関しては、マンガ原画のデータベースとの連動の重要性も確認されたほか、メディア芸術データベースをはじめとして、複数の既存のデータベースとの連携に向けた調査を、来年度以降も掘り下げていくこととなった。

### C) (マンガ刊本アーカイブセンターを維持していくための) 収益の問題

将来的課題ではあるが、いずれ現実的かつ具体的な解決方法を見いだす必要があると確認された。議論の中で、一つの参考とされたのは、原画アーカイブ事業で実験されている展覧会のパッケージ化とその収益化モデルである。そこで、来年度以降、原画事業との連携を深め、刊本アーカイブを活用した展覧会制作の可能性を協議していく予定とした。

---

全体として、今年度もコロナ禍の影響下、対面によるネットワーク構築は限定的な実施となった。その上で、原画・刊本合同でのオンライン会議を軸に、メンバー間で明確なテーマに基づき定期的にミーティングを実施できた結果、5か年計画の3年目として必要な課題を析出・共有したことは評価に値する。ただし、課題の具体化に伴い、刊本アーカイブセンターの実装に向けた綿密な計画性と体系性が求められる中、原画事業との連携強化や刊本プールの調査結果のとりまとめを、一層着実に進める必要がある。

## 第3章 実施内容

### 3.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

#### 【「マンガ刊本アーカイブセンター」構想の全体像について】

本事業においては、先行する原画プロジェクトと対になる形での「マンガ刊本アーカイブセンター」（以下 AC）の構想について検討を重ねてきた。その基本的な機能についてはおおよそ固まりつつある一方、副次的な幾つかの機能についてはその実現可能性も含めて議論が決着していない部分が残っている。

「マンガ刊本アーカイブセンター」に求められる基本的な機能としては以下の4点が想定される。

#### 〔アーカイブセンターの機能〕

- ①刊本に関わる諸問題の相談窓口
- ②刊本の取扱いに携わる専門人材の育成
- ③刊本アーカイブネットワークのハブ拠点
- ④刊本の収集、保存、活用（の計画立案）

ここで強調しておかねばならないのは、AC それ自体が刊本の収集を直接的に担う主体とはならない点である。飽くまでマンガを多く収蔵する所蔵館（図 3-1「マンガ関連施設」が主としてこれに相当する）同士をつないでネットワークを構築するためのハブ≡司令塔として AC が存在する状態が望ましい。そもそも本事業が「所蔵館連携」を目的に掲げている前提として、既存施設の現場にかかる種々の作業負荷が過大でありマンパワーが全く足りていない現状がある。そこで、各施設がこれまで単独で行ってきた資料の収集保存について連携を図ればなにがしかの省力化が可能ではないか、また収蔵庫の狭隘〔きょうあい〕化問題についても資料の共同運用が問題解決の糸口になるのではないかと、というのが発想の根幹にあった。原画・刊本両事業ともに、マンガ文化の今後の発展あるいは継承において重要な資料をきちんと収集・保存していかなければならないとの更に大きな究極的な目標があるのだが、現在稼働している各施設の持続可能な体制作りという（一見するとやや後ろ向きな）問題もまた重要な課題である。しかし、この二つの要求は構造的に対立するものである。完全なアーカイブへ近づこうとすればするほど、膨大な収蔵スペースと整理のための作業人員が必要となり、（予算が無限に増えるわけではないので）現場の負荷は増大する。逆に、新規の資料収集を行わなければ作業負担は減るものの、残すべき資料の散逸は不可避である。こうしたトレードオフ関係はマンガに限らずあらゆる分野のアーカイブが普遍的に抱える問題であるが、我々（日本国内のマンガ関連施設に携わる人間）としては、マンガの原画・刊本という具体的な対象についてどのような妥協点が適切なのかを慎重に見極める責任を有しているとも言えるだろう。これらを踏まえた上で、AC が刊本の収集・保存に主体的に関わるだけの予算措置が見込めない以上、可能な選択肢としては所蔵館連携の核となるフロント的役割に徹する必要がある。

今年度の議論では、過年度までの議論で混乱を生じさせていた正本／複本という用語の曖昧な流用を避けるため、「責任保存資料」という概念を仮に提起した。これは刊本アーカイブが理想的に収集・

### 第3章 実施内容

保存すべき対象の総体を指すことばである。これを所蔵館ネットワークの中で緩やかに分け持つことができればよいが、そのためには各館の所蔵情報を横断的に総覧できる機能が必要である。何が、どこに、どれだけあるのかが可視化されなければ、現在各所蔵館が手元に保持している資料の相対的な価値も明瞭ではないし、今後新たに収集すべき（各所蔵館にとっての必要性とは別の水準、すなわちネットワークとしての水準での必要性を持つ）資料が何であるのかも明確にならない。ACの機能として先に挙げたうち、特に①③④のような中心的機能を果たすためには、ACが責任を持って管理・運営することが求められる。図3-1の「刊本データベース」と呼ばれているものの詳細については次節以降に譲るとして、将来的には原画情報と紐付けられた形での「文化庁メディア芸術データベース」への情報提供が期待される。

マンガ分野で刊本ACに先行している「マンガ原画アーカイブセンター」では、データの連携といった課題よりも現物資料（今まさに廃棄されそうになっている原画そのもの）の緊急避難的収集・保存に関する相談及びその対応がセンター業務の中で大きな比重を占めつつある。刊本ACにおいても同様の要請が生じるであろう事態は想像に難くないものの、原画以上に膨大な物量を伴う刊本で同じ作業をやらうとすれば即座に破綻を来す。先述したように、当面は、相談窓口としてのフロント機能及びそれを支える各館から集約された情報の管理・運営機能というのが、刊本ACにとって最も重要な役割であると今一度強調しておきたい。

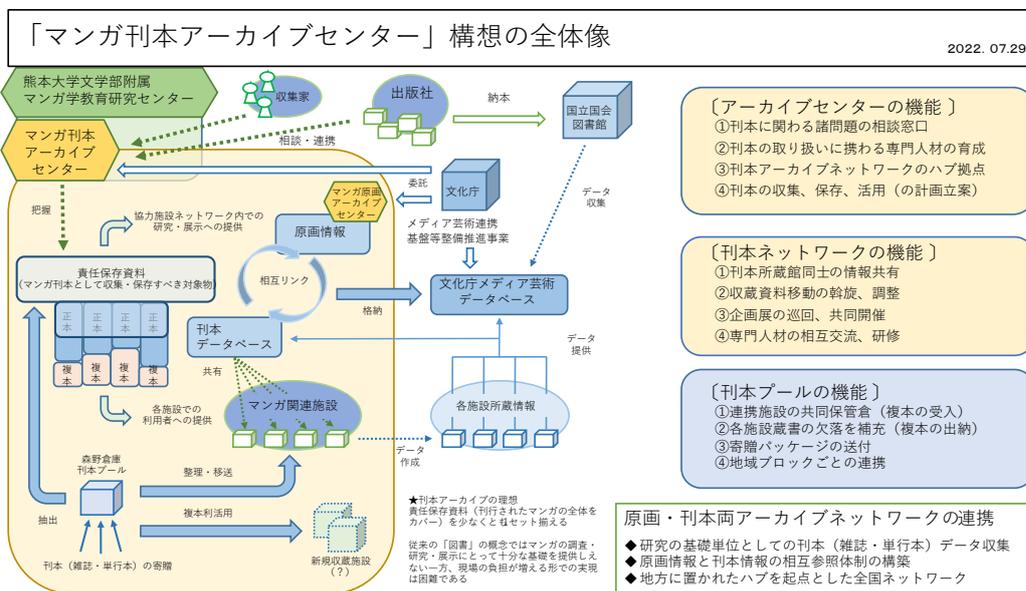


図3-1 「マンガ刊本アーカイブセンター」の全体像

### 3.2 刊本ネットワーク所蔵リストの構築準備

#### 【協同所蔵リスト作成へ向けての課題】

令和2年度・令和3年度の刊本事業において、協同所蔵リスト作成のために所蔵館が共有で使用できるデータベースが必要ではないかという意見を受け、第2回～第4回の刊本AC設置準備委員会などで具体的な検討を行った。

既存のメディア芸術データベース（ベータ版）（以下MADBベータ版）の目的や役割を踏まえた上で、MADBベータ版との機能の切り分けを行った上で相互に情報連携を行う体制の構築が望ましいとの結論となった。

具体的には「所蔵館が直接ログインして自館の情報を更新する機能」や「データを公開せず、ログインしている所蔵館の間のみで情報共有する機能」がMADBベータ版の機能にはなく、将来的にもこれらの機能の追加予定がないとの状況から、協同所蔵リスト作成・運用の必要性がより明確になった。

また、MADBベータ版はアグリゲーターであることから、MADBベータ版の運用としては、自身による過去遡及分のデータ追加作成の優先度は低いとされているが、逆にこれらは過去の刊行物を主に扱っている所蔵館側が新たな追加対象となるデータを持つケースが多い。そのため、MADBベータ版の「新規の刊行物のデータ投入」と、協同所蔵リスト作成運用での「過去遡及に当たるデータ投入」とを互いが役割分担し、相互補完することが望ましい。なお、メディア芸術アーカイブ推進支援事業の採択によって作成されたデータについては過去遡及分に当たるデータも含まれており、これらは検討を経た上でMADBベータ版側に投入される運用が想定されている。

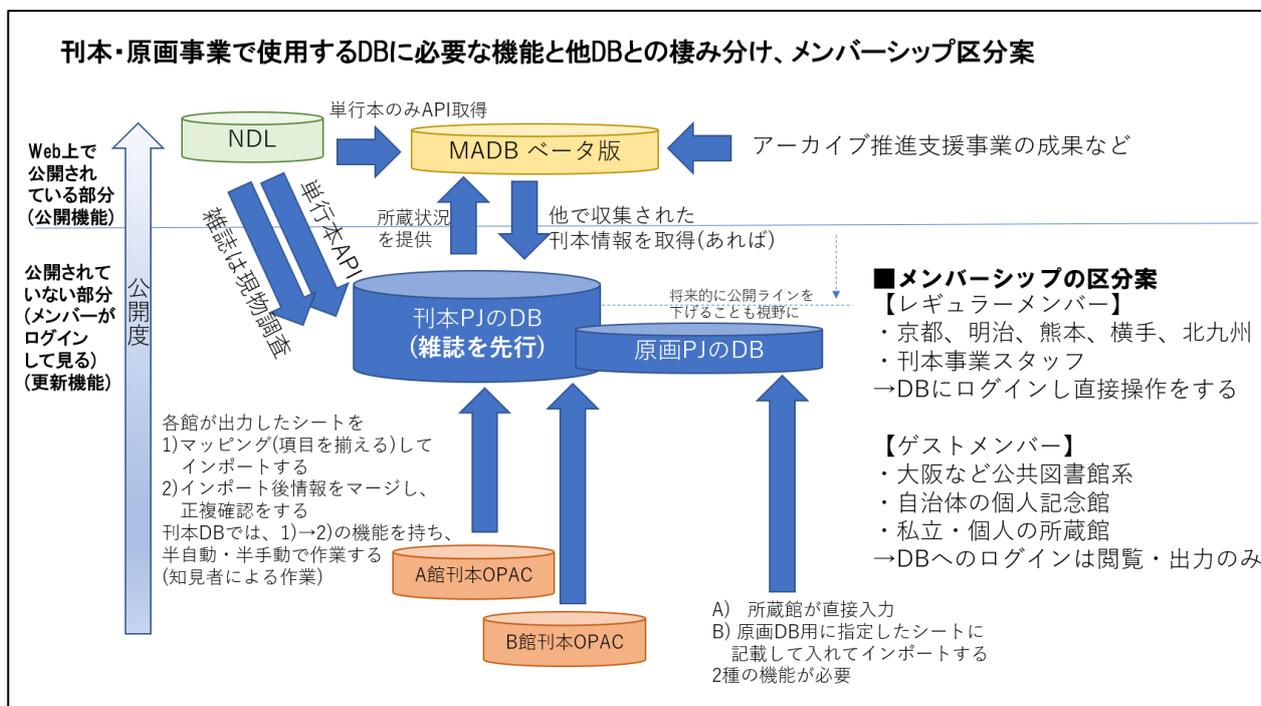


図 3-2 協同所蔵リスト作成に係る MADB ベータ版との役割分担案

### 第3章 実施内容

課題として、別途のデータベースが構築されることになったとしても、実際の運用の担い手をどう分担するかについては更に検討すべきである。協同所蔵リスト作成への参加については所蔵館の体制や規模によってグラデーションがあり、すべての所蔵館が同質の参加は難しいため、所蔵館のメンバーシップを「レギュラーメンバー」「ゲストメンバー」などに区分して、「データ更新可のメンバー」「閲覧のみのメンバー」と機能を振り分けるなどの案が出た。区分の種類やその内容など、実際の運用体制と直結する内容であり、より詳細な検討が必要である。

そのほか、刊本だけでなくマンガ原画の所蔵についても情報共有できる機能が求められているため、マンガ原画の所蔵情報を集約する情報の整理ないしはデータベースの構築がなされた際に、マンガ原画の所蔵情報と刊本の雑誌の掲載目次情報を紐付け、マンガ原画の初出データを特定して可視化するなどの機能も期待されている。

#### 【今後の連携機関について】

新たな所蔵館ネットワークの候補として、6万冊の単行本と雑誌を所蔵し閲覧施設を民間で運営している「少女まんが館」（東京都あきるの市）を訪問し、来年度以降の当事業への協力についての簡易ヒアリングを行った。「少女まんが館」は複本の活用として佐賀県や三重県にそれぞれ別運営の分館と連携をしており、複本の利活用事例としても参考になる部分が多く、立ち位置を含めて当事業とどういった連携が可能かを含めて検討を継続する。

#### 【刊本利活用 BOX について】

「刊本利活用 BOX」は令和3年度事業より開発検討が進められ、実際の使用を経て「単行本 新書判・B6判兼用」「単行本 A5判用」「雑誌 B5判用」の3種類について大量制作を行った。

特にマンガ単行本については判型が数種類に定まっており、かつ全体的に小型のため既存の段ボール箱や収納 BOX などでは大量の単行本のセットでの管理がしづらいため、専用 BOX の開発が求められていた。

試行錯誤を繰り返した結果「刊本利活用 BOX」は下記の特徴を持ったものとなった。

- ・段ボール製で、平らな状態からテープ類なしで組み立てられる
- ・単行本や雑誌のサイズに特化し、「単行本 新書判・B6判兼用」「単行本 A5判用」はいずれも20～30冊が収納でき、「雑誌 B5判用」は15～24冊が収納できる
- ・（単行本用）背表紙の一覧性にすぐれ、マンガ単行本の特徴である長大な全巻セットが可視化される
- ・（単行本用）ある程度の強度があり、縦に積んで簡易的な本棚として使用したり、横にして出し入れする面を上に向けて数段積み重ねて省スペース保管をしたりといった活用が可能である
- ・（単行本用）L字型の手穴が縦・横用につき、運搬しやすい構造・大きさである

### 第3章 実施内容



図 3-3 刊本利活用 BOX の組立て前の状態

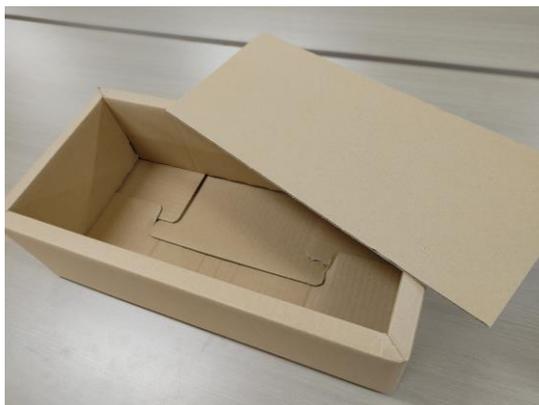


図 3-4 組立て後の状態と中敷き



図 3-5 「単行本 新書判・B6判兼用」に収納し縦に積み重ねた状態



図 3-6 「単行本 新書判・B6判兼用」を横にして積み重ねて効率的に保管している状態



図 3-7 「単行本 A5判用」(左)と「雑誌 B5判用」(右)。「雑誌 B5判用」は大判単行本にも使用可

3種の刊本利活用BOX仕様 (組立て後、いずれも単位はcm)

「単行本 新書判・B6判兼用」外寸 縦23.8×幅48.5×奥行13.8、内寸 縦19.8×幅44.5×奥行12.8

「単行本 A5判用」 外寸 縦28.0×幅53.0×奥行15.0、内寸 縦24.0×幅49.0×奥行14.0

「雑誌 B5判用」 外寸 縦33.0×幅48.5×奥行19.5、内寸 縦29.0×幅44.5×奥行18.5

「刊本利活用BOX」の仕様が決まったのち、段ボール業者へ専用の木型制作を依頼し大量発注を可

能にした。現在、森野倉庫内での仕分作業や作業後の運搬で使用され、合志マンガミュージアムほかの連携先でも活用されている。

また、そのまま展示棚などに使用できるように、段ボール色でない白色などのカラーバリエーションを試作し新たな活用を検討している。



図 3-8 「単行本 新書判・B6 判兼用」の白バージョン試作品

### 3.3 刊本プール資料の仕分と移送に関する作業実験

#### 【森野倉庫での作業報告】

##### ●資料整理

平成 27 (2015) 年から使用している森野倉庫では、これまで搬入された資料の中で、雑誌と単行本が混在していたので、エリアを区別して収蔵することにした。雑誌については、一部資料を森野倉庫から一旦熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センターに移送して整理作業に当たり、単行本については森野倉庫で特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト (以下 クママン) のメンバー中心で作業を行った。

単行本の整理に当たって、「刊本利活用 BOX」として「単行本 新書判・B6 判兼用」「単行本 A5 判用」「雑誌 B5 判用」の 3 種類について実際の活用を通じて改良を重ね、仕様を確定した。今後もこれらの 3 種類の「刊本利活用 BOX」を用いて資料の整理分類を行っていく。

##### ●雑誌の整理手順

倉庫内に点在している雑誌をジャンルごとにまとめ、少年少女雑誌、青年女性雑誌、学年誌、一般

雑誌、専門誌誌（アニメ、ゲーム、特撮、声優など）を区分した。

その後、倉庫内にある「週刊少年ジャンプ」を一箇所にとまとめた上で森野倉庫から搬出。熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センターに移送し、年代別・号数順に揃[そろ]えてリストを作成。バラバラだった箱の大きさを統一して収納、作業終了後は森野倉庫に戻した。今後、森野倉庫にあるほかの雑誌についても同様の作業を継続する予定である。

#### ●単行本の整理手順

クママンに依頼して下記の作業実験を行った。

廃業したレンタルコミック店から寄贈された 10,000 冊のコミック単行本を、出版社別、作家別に分類した。7月から8月にかけて、クママンのスタッフ4名が1日4時間、計70時間の作業で整理を終えた。作業手順は下記のとおりである。

単行本を読者の対象別に「少年、少女、青年、女性」に区分→ 出版社別に分類、巻数順に並べる→ セットごとに刊本利活用 BOX に収納→ レンタル用のプラケース・ブックカバーを外す→ 出版社別にセット本を積みあげる→ 搬出に備えて BOX の横面に内容を略記したラベルを貼り付ける

この資料は、令和3年度に設置した人吉市内の「くまりば」の図書コーナー（2,000冊）の資料入替え（1,000冊分）や、高知まんが BASE への単行本の寄贈（少年マンガ11箱、少女マンガ9箱、青年マンガ10箱、合計30箱。約2,300冊）などに充てた。



図 3-9 レンタルコミック店寄贈の刊本資料（プラスチックケース入り）



図 3-10 刊本利活用 BOX による整理分類

#### 【雑誌の整理作業について】

森野倉庫に保管されている「週刊少年ジャンプ」について、所蔵している巻号とそれぞれの冊数の調査を実施した。創刊時の月2回刊時代を含め「週刊少年ジャンプ」は昭和43（1968）年から現在までと刊行されている歴史が長く、また様々な経路での寄贈を受けやすく80箱以上の箱が森野倉庫内にあるため、その内容を整理し所蔵データ化の効率的な実施を目的としている。調査に当たり、雑誌サイズの大きさと総量の多さから森野倉庫内での作業は効率的でないため、熊本大学内の文学部附属マンガ学教育研究センター内に移動して以下の内容で作業を行った。

#### ●調査対象

集英社「週刊少年ジャンプ」本誌（増刊は含まない）

#### ●事前準備

メディア芸術データベース（ベータ版）（以下MADBベータ版）で公開されている「週刊少年ジャンプ」本誌（創刊時の月2回刊時代を含む）の2,416冊の巻号リストを事前に準備しておき、「○月○月号」表記（表示日）と背表紙などの「○号」（表示号数）が分かるようにリストを作成して紙にプリントしておく。なお、令和5（2023）年1月現在、MADBベータ版の雑誌データは平成30（2018）年7月以降の巻号データは存在しない。

#### ●調査体制

広い場所に『週刊少年ジャンプ』が入った箱を並べ、連結した長いテーブルを2列準備する。作業は同時に2～3人で行う。

#### ●調査手順

- 1) 作業対象を「1968～1989年」「1990～1999年」「2000～2007年」「2008～2015年」「2016～2021年」の5回に分けて作業する。この区分は所蔵のおおよその物量傾向から便宜的に分割したもので、作業ボリュームによって適宜変化する。
- 2) 作業場所に広げられた箱群から、作業対象の「1968～1989年」などに該当するものをピックアップしてテーブルの1列に置く。その際に箱の中身の傾向が分かれば「1990年」などの紙を箱に貼り可視化していく。ピックアップに漏れないよう、2人以上でダブルチェックをする。



図 3-11 広い場所で雑誌の入った箱全体を可視化し、作業対象をピックアップしていく

- 3) 作業対象からピックアップされた雑誌を拭いて埃や汚れを取り、本誌でない増刊や破損がひどいものなどは除外しておく。
- 4) もう一つの列のテーブルに刊行順に並べる。この際に背表紙にある数字（表示号数）を基準とすると可視化されやすい。複本がある場合も同時に並べて冊数が明確になるようにする。
- 5) プリントした『週刊少年ジャンプ』本誌リストに、各巻号の有無とあればその冊数を記録する。合併号の存在などがまぎらわしいため、2人でダブルチェックを行う。



図 3-12 刊行順に並べ、作成しておいた巻号リストに冊数などを記載していく

- 6) 刊行順に箱詰めする。箱には「ZKM00001」からの箱番号を付与し、リストにも箱番号を記載してどの箱にどの巻号が入っているかを明確にする。
- 7) 平成 30（2018）年 7 月以降刊行のデータは MADB ベータ版では公開されていないため、所蔵し

ている冊子から一部のメタデータを直接取得してリストに記載する。記載するメタデータは、「〇月〇日号」の「表示月」と「表示日」、背表紙の「〇号」の「表示号数」で、これらは合併号の場合は複数あるため（「1月8日・1月9日号、2・3合併号」）それぞれを記載する。また、雑誌に一般的に記載されている場合が多い「巻・号・通巻」についても記載する。これらは背表紙近くに記載されているため、5) の並べている状態で冊数とともに記載する。



図 3-13 背表紙などに記載された「〇月〇日号」「〇号」などのメタデータ

8) 記載したメタデータは Excel に転記し、データとして活用できるようにする。

#### ●調査結果

雑誌の冊数は 1,580 冊、うち重複を除いて 1,137 冊の所蔵があり、「週刊少年ジャンプ」本誌の創刊から 2021 年まで 2,582 冊発行されたうちの約 44% を所蔵している実態が明確になった。所蔵のうち 443 冊（所蔵の 28%）は重複しているが、これは平成 19（2007）年以降が特に多い傾向がある。寄贈の時期が平成 22（2010）年以降のため、この年代が特に多くなっている。逆に、近年であって

### 第3章 実施内容

も完全には揃わず、幾つか欠号も見られる。

また、作業員 5 人（同時作業は 2～3 人）で業務完了にかかった総時間は 44 時間（期間は約 4 日間）で、大量の作業であるが作業場所の事前準備により、効率的に箱詰め整理までを実施できた。最初のピックアップ作業にやや時間がかかるが、箱の中身を可視化する作業を並行するとスピードアップを図れる。また、同一雑誌は傾向があるため作業員が学習しやすくより効率よく作業ができることも分かった。

箱詰めした雑誌は 70 箱となり、箱には雑誌名と入っている発行年・号数の最初と最後を記載したものを貼り、森野倉庫へ戻して保管した。



図 3-14 箱詰め後

#### 【今後の課題】

文化庁事業として行ってきた刊本事業（複本の整理と活用、作業にかかる時間と費用の抽出）の実証実験で、この 3 年間の間に見えてきた課題は次のとおりである

- ①森野倉庫は熊本市内にあり、比較的アクセスには便利であるが、空調、湿度管理ができず、保存、作業環境の面からは使い勝手がいいわけではない。
- ②倉庫代、刊本整理のための人件費やその他の費用も考慮すると維持が容易ではない。
- ③平成 27（2015）年当初は倉庫内のスペースに余裕があったが、他施設からの搬入、熊本地震後に

増えた寄贈本などでスペースが圧迫されてきている。

④森野倉庫にある資料には、熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター（以下 RC）の蔵書は含まれていない。今後 RC での収蔵が稼働しクママンから寄贈を受ける場合など、森野倉庫資料との関係を整理しておく必要がある。

⑤モノを持たない施設であるマンガ刊本アーカイブセンター（AC）と、森野倉庫資料との関係も整理が必要。仮に、10万冊を超える本を収蔵する森野倉庫がなくなると多くの資料が行き場をなくして、場合によっては大量に廃棄せざるを得なくなる。今後収蔵施設として活用するか否かといった森野倉庫の活用方針について検討を始める必要がある。

#### 【平成 27（2015）年以降の森野倉庫における資料移送事業の成果と課題】

##### ①施設間連携事業 … 共同保管倉庫

- ・インプット…北九州市漫画ミュージアム、京都国際マンガミュージアム、明治大学米沢嘉博記念図書館・明治大学現代マンガ図書館からの資料の受け入れ 40,000 点
- ・アウトプット…県内施設に 12,000 点、海外のブラジル、コロンビア、中国に 6,000 点の単行本、高知県まんが BASE へ 4,000 点の雑誌を送付

##### ※課題

- ・森野倉庫の問題点
  - 収蔵キャパシティ、収蔵スペースとしての環境
- ・出納業務の限界
  - 人員、必要性、作業効率
- ・複本プールの稼働限界
  - 想定よりも多すぎる複本の量、複本の受入先不足
  - 有償・無償レンタルは手間がかかる
  - 複本のデータ化費用、発送業務の費用のめど

##### ②人材育成事業 … 刊本事業に関わったスタッフのスキルアップ

- ・刊本の分類基準の習得、正本・複本チェック、セット本・移送パッケージ製作のスキル向上（事業内でスキルアップしたスタッフが、後に合志マンガミュージアム、湯前まんが美術館などの専門施設に就職する例もみられた）

##### ※課題

- ・養成した人材を恒常的に雇用する手立てが少ない
- アーキビスト、ライブラリアン、キュレーターのスキルアップカリキュラムがない  
外国語に翻訳された日本のマンガを整理する人手不足

### 3.4 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての合同会議

第1回 令和4年4月15日（火） 16:30～18:30 オンライン会議（Zoomにて開催）

①今年度マンガ両事業概要について

・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」

・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

・各事業質疑応答

②年間スケジュールについて

・「マンガアーカイブ協議会」（合同会議）概要

・合同会議年間スケジュール予定の共有

第2回 令和4年6月20日（月） 10:00～12:00 横手市増田まんが美術館 ワークショップルーム / オンライン会議（Zoomにて開催）

①今年度マンガ両事業概要と進捗について

・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」

・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

②「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設立に向けた協議

・今年度実装に向けた取組について

・運営方法について（規約について ほか）

・産業界との連携について

株式会社講談社 専務取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議

第3回 令和4年8月5日（金） 16:30～18:00 オンライン会議（Zoomにて開催）

研修：マンガ原画におけるマンガ家及び所有者からの寄贈・寄託・相続に関する受入館が知っておくべき税務上での知識について

研修講師

山内康裕 一般社団法人マンガナイト代表理事・一般社団法人さいとう・たかを劇画文化財団理事長

山内真理 公認会計士・税理士 Arts and Law 理事

第4回 令和4年10月14日（金） 15:00～17:00 オンライン会議（Zoomにて開催）

①マンガ分野データベース構築に向けた勉強会

### 第3章 実施内容

- ・専門業者（ゲスト）からの会社紹介  
※ゲスト：株式会社スリーエース、早稲田システム開発株式会社
- ・専門業者へのヒアリング及び意見交換

#### ②原画事業・刊本事業の進捗について

- ・熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター（RC）
- ・マンガ原画アーカイブセンター（MGAC）

第5回 令和4年12月10日（土） 10：00～11：30 熊本大学 文法学部棟2階 共用  
会議室 / オンライン会議（Zoomにて開催）

#### ①今年度の事業進捗共有

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」
- ・各事業質疑応答

#### ②「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

- ・組織体制についての協議
- ・両事業の統合へ向けてのスケジュール検討

第6回 令和5年2月1日（水） 15：50～17：30 オンライン会議（Zoomにて開催）

#### ①今年度マンガアーカイブ協議会の振り返り

- ・第一回：キックオフミーティング
- ・第二回：講談社取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議
- ・第三回：マンガ原稿関わる税務研修
- ・第四回：マンガ分野データベース構築に向けた勉強会
- ・第五回：「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

#### ②「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

- ・組織体制についての協議
- ・今後の計画について

### 3.5 実施会議内容

#### 【マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会】

第1回 令和4年6月3日（金） 16：00～17：30 オンライン会議（Zoomにて開催）

以下の各項目について協議決定を行った。

- ①参加者の紹介
- ②議事

### 第3章 実施内容

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有  
令和2・3年度の事業における成果の内容を踏まえ、令和5(2023)年10月に「マンガ刊本アーカイブセンター」を設置するまでに必要となる検討事項の確認を行った。特に「責任保存資料」の定義が重点的な検討事項であると確認した。
- ・事業年間スケジュールの確認  
今年度のマンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会(全5回)の開催日程と各回の参加者・協議内容について決定した。
- ・今後のロードマップについての意見交換  
今年度予定されている各事業の内容と到達目標について確認した。
- ・次回会議に向けて  
第2回委員会において、より有意義な刊本ネットワークの構築のために必要となる検討事項を確認した。

#### ③事務連絡

参加者： 吉村和真、イトウユウ、鈴木寛之、池川佳宏、橋本 博、日高利泰

オブザーバー： <文化庁> 吉井 淳、椎名ゆかり、岩瀬 優、牛嶋興平

<メディア芸術コンソーシアムJV事務局> 森 由紀、池田敬二、岩川浩之、  
藤本真之介、横江愛希子

第2回 令和4年7月29日(金) 16:00~17:30 オンライン会議 (Zoomにて開催)

以下の各項目について協議決定を行った。

#### ①参加者の紹介

#### ②議事

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有  
「マンガ刊本アーカイブセンター」設計構想の確認をし、刊本アーカイブの在り方を論じる上で必要となる「責任保存資料」「正本」「複本」の概念について再整理を行った。
- ・マンガ刊本データベース構築に向けての意見交換  
刊本・原画事業で使用するDBに必要な機能とほかDBとの住み分け、メンバーシップの区分案の内容をもとに、刊本事業で構想するDBの在り方について検討し、次回委員会で引き続き協議を行うことになった。
- ・次回会議に向けて  
9月下旬開催予定の第3回委員会において、より有意義な刊本ネットワークの構築のために必要となる検討事項を確認した。

#### ③事務連絡

今後の会議スケジュールの確認を行った。

### 第3章 実施内容

参加者： 吉村和真、鈴木寛之、池川佳宏、橋本 博、日高利泰、田中千尋、三崎絵美、渡邊朝子

オブザーバー： <文化庁>椎名ゆかり、奥山寛之、牛嶋興平

<メディア芸術コンソーシアムJV事務局> 森 由紀、池田敬二、岩川浩之、  
藤本真之介、横江愛希子

#### 第3回 令和4年9月27日（金） 13：00～15：00 オンライン会議（Zoomにて開催）

以下の各項目について協議決定を行った。

##### ①参加者の紹介

##### ②議事

【第1部】熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター（RC）設置に関する情報共有  
熊大RCの設立趣旨と概要、刊本AC業務との関係について説明を行い、質疑応答を行っ  
た。

【第2部】ネットワーク各館におけるOPAC（Online Public Access Catalog）登録方法に関す  
る紹介

事例共有のため、京都国際マンガミュージアム、明治大学米沢嘉博記念図書館、北九州市  
漫画ミュージアムの各館からの事例報告を行い、質疑応答を行った。

##### ③事務連絡

今後の会議スケジュールの確認を行った。

参加者： 吉村和真、イトウユウ、鈴木寛之、池川佳宏、橋本 博、日高利泰、田中千尋、

三崎絵美、渡邊朝子

オブザーバー： 大石 卓

<文化庁>椎名ゆかり、牛嶋興平

<メディア芸術コンソーシアムJV事務局> 森 由紀、池田敬二、  
藤本真之介、横江愛希子

#### 第4回 令和4年12月11日（日） 10：00～11：30 ハイブリッド会議

場所 熊本大学 文法学部棟2階 共用会議室 / オンライン会議（Zoomにて開催）

以下の各項目について協議決定を行った。

##### ①参加者の紹介

##### ②議事

- ・マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究報告  
今年度の刊本事業の経過報告があり、質疑応答が行われた。

### 第3章 実施内容

- ・マンガ原画アーカイブセンター実装化の過程についての情報の共有  
今年度の原画事業の経過報告の後、センター実装化の過程について質疑応答が行われた。
- ・メディア芸術データベース（以下 MADB）刊本データに関する情報共有  
MADB 刊本データの性格について池川氏より報告があった
- ・公開データセットについての情報共有  
MADB 刊本データの性格を踏まえ、刊本事業で必要になる所蔵リストの内容について協議を行った。
- ・次回会議に向けて  
今後の会議スケジュールを確認した。

#### ③事務連絡

参加者： 吉村和真、イトウユウ、鈴木寛之、池川佳宏、橋本 博、日高利泰、大石 卓  
オブザーバー： 表 智之、安田一平  
＜文化庁＞牛嶋興平  
＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞ 森 由紀、藤本真之介、  
佐原一江、横江愛希子、福田佳奈

第5回 令和5年2月1日（水） 14：00～15：40 オンライン会議（Zoom 会議・第2回マンガ原画アーカイブセンター運営協議会との合同開催）

#### (1) MGAC 運営協議会

- ・各部会の今年度取組状況報告  
収益部会、マニュアル部会、ネットワーク部会
- ・R4 年度原画プール実施状況（1/31 現在）
- ・今後のマンガ原画アーカイブセンター事業の方向性について

#### (2) 刊本 AC 設置準備委員会

- ・今年度取組状況報告  
実装化に向けた調査研究、ネットワーク所蔵リスト、刊本プール
- ・今後の刊本事業の方向性について

#### (3) 今後の原画・刊本事業の連携について

参加者： 吉村和真、イトウユウ  
マンガ原画アーカイブセンター運営協議会  
大石 卓、表 智之、ヤマダトモコ  
刊本アーカイブセンター設置準備委員会  
鈴木寛之、池川佳宏、橋本 博、日高利泰

### 第3章 実施内容

オブザーバー： 安田一平、田中千尋、渡邊朝子  
＜文化庁＞牛嶋興平、椎名ゆかり  
＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞ 森 由紀、池田敬二、  
藤本真之介、佐原一江、横江愛希子

#### 【マンガアーカイブ協議会】

第1回 令和4年4月15日（火） 16:30～18:30 オンライン会議（Zoomにて開催）

##### ①今年度マンガ両事業概要について

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」
- ・各事業質疑応答

##### ②年間スケジュールについて

- ・「マンガアーカイブ協議会」（合同会議）概要
- ・合同会議年間スケジュール予定の共有
- ・第2回会議の日程調整

第2回 令和4年6月20日（月） 10:00～12:00 横手市増田まんが美術館 ワーク  
ショップルーム / オンライン会議（Zoomにて開催）

##### ①今年度マンガ両事業概要と進捗について

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

##### ②「マンガアーカイブ機構（仮称）の設立に向けた協議

- ・今年度実装に向けた取組について
- ・運営方法について（規約について ほか）
- ・産業界との連携について  
株式会社講談社 専務取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議

＜ゲスト参加者＞ 有識者検討委員：森田浩章氏

第3回 令和4年8月5日（金） 16:30～18:00 オンライン会議（Zoomにて開催）

研修：マンガ原画におけるマンガ家及び所有者からの寄贈・寄託・相続に関する受入館が知っておく

### 第3章 実施内容

べき税務上での知識について

研修講師

山内康裕 一般社団法人マンガナイト代表理事・一般社団法人さいとう・たかを劇画文化財団理事長

山内真理 公認会計士・税理士 Arts and Law 理事

第4回 令和4年10月14日(金) 15:00~17:00 オンライン会議 (Zoomにて開催)

①マンガ分野データベース構築に向けた勉強会

・専門業者(ゲスト)からの会社紹介

※ゲスト:株式会社スリーエース、早稲田システム開発株式会社

・専門業者へのヒアリング及び意見交換

②原画事業・刊本事業の進捗について

・熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター (RC)

・マンガ原画アーカイブセンター (MGAC)

<ゲスト参加者>

MADB 有識者: 杉本重雄・三原鉄也

ゲスト企業: 株式会社スリーエース

今村大介、増田賢治、藤原巧

早稲田システム開発株式会社

内田剛史

第5回 令和4年12月10日(土) 10:00~11:30 熊本大学 文法学部棟2階 共用会議室 / オンライン会議 (Zoomにて開催)

①今年度の事業進捗共有

・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」

・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

・各事業質疑応答

②「マンガアーカイブ機構(仮称)」設置構想について

・組織体制についての協議

・両事業の統合へ向けてのスケジュール検討

### 第3章 実施内容

第6回 令和5年2月1日(水) 15:50~17:30 オンライン会議 (Zoomにて開催)

①今年度マンガアーカイブ協議会の振り返り

- ・第一回：キックオフミーティング
- ・第二回：講談社取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議
- ・第三回：マンガ原稿関わる税務研修
- ・第四回：マンガ分野データベース構築に向けた勉強会
- ・第五回：「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

②「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

- ・組織体制についての協議
- ・今後の計画について

## 付録 熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター開設記念シンポジウム 「マンガ刊本アーカイブのめざすもの」開催について

令和4年（2022年）12月10日に、熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センターの開設記念として、同センター主催のシンポジウム「マンガ刊本アーカイブのめざすもの」を開催した。

同センターは日本のマンガ・アニメなどの現代文化資源の分野における国際的研究拠点として、マンガをはじめとする現代文化資料群のアーカイブ化を行い、現代文化資源を活用した地域活性化への寄与を目的の一つとしている。本シンポジウムは「刊本の収集」が産学官連携による「マンガ県くまもと」構想の継続的な事業であり、かつ日本各地にあるマンガ関連アーカイブ施設と連携した全国的な規模の取組としての重要性をアピールするものとして企画された。

シンポジウムは、第一部「国際マンガ学教育研究センターの展望」で本センターが計画する刊本アーカイブが目指す内容とその意義について、第二部『刊本』と『原画』両アーカイブのさらなる連携に向けてで、日本各地のマンガ関連アーカイブ施設で展開されている刊本と原画の展示企画の事例などについてパネルディスカッションを行った。

来場者数は120人の満員となり、参加者から多くの質問が寄せられ活発なシンポジウムとなった。テレビ熊本、熊本朝日放送のテレビ局、熊本日日新聞、日本経済新聞、くまもと経済、肥後ジャーナルなどのマスコミ取材があり、報道された。



シンポジウム会場の様子

熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター開設記念シンポジウム  
「マンガ刊本アーカイブのめざすもの」概要

付録

- 【日 時】 令和4年12月10日（土） 14:00～16:30（開場13:30）  
【場 所】 熊本大学黒髪北地区 文法学部本館2階「A1講義室」  
【主 催】 熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター  
【協 力】 文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業 / くまもとマンガ協議会

【プログラム】

- （司会）鈴木 寛之 熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授
- 14:00 開会挨拶 小川 久雄 熊本大学学長
- 14:05 趣旨説明 鈴木 寛之 熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授
- 14:15 パネルディスカッション
- （第一部）「国際マンガ学教育研究センターの展望」
- 吉村 和真 京都精華大学専務理事／マンガ学部教授 \*司会進行
- 水元 豊文 熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター長／文学部長
- 日高 利泰 熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授
- 橋本 博 特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表／合志マンガミュージアム 館長
- 15:15 パネルディスカッション
- （第二部）「『刊本』と『原画』両アーカイブのさらなる連携へ向けて」
- 池川 佳宏 熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター 特定事業研究員 \*司会進行
- イトウユウ 京都精華大学国際マンガ研究センター特任准教授
- 大石 卓 横手市増田まんが美術館 館長
- ヤマダトモコ 明治大学米沢嘉博記念図書館 展示スタッフ（欠席のためビデオ出演）
- 表 智之 北九州市漫画ミュージアム 専門研究員
- 16:25 閉会挨拶

本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した令和4年度「メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。  
転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。